橘くんへの思いを引きずったまま始まった高校生活は、それなりに楽しく、けれども、いつでもふわふわと宙に浮いて、足元のしっかりしないものだった。

勉強などそっちのけで、遊びに遊んだ。お嬢さんの多いミッション系の女子校だったが、派手に遊んでいる子も多かった。早熟な子も多く、

「男の子、紹介してあげるよ」

と何度も言われた。が、有希の返事は決まっていた。

「私、好きな人がいるからいい」

そんな有希に同情してか、あるとき友達のユカが橘くんの新しい彼女を見に行こうと言いだして。

「だってどんな子かわかんないんじゃ、奪回作戦の計画も立てられないじゃない。有希、どうしても彼がいいわけでしょ?　たいした女の子じゃないかもしれないしさ、敵を視察に行こうよ」

気は進まなかったが、言われてみれば、そうかもしれないと思った。できることなら彼をもう一度取り戻したい、その気持ちは強かったし、新しい彼女がどんな子か、少なからず興味もあった。

翌日、学校帰りに函館駅で待ちぶせをした。電車で通学している彼女は、必ずそこを通るはずだった。ユカとふたりで立ったまま、有希は息をつめて彼女を待った。

「まだかなぁ」

妙な緊張している有希に比べ、ユカはなんだか楽しそうだ。

べつにかちあわせするわけでなく、ただ盗み見るだけだというのに、有希はマスカラでまつ毛を長くして、リップも丹念に塗っていた。ブローもしっかりキメてきた。なんとなく負けたくなかったし、それに彼と会う可能性がないでもない。たいした子じゃなかったら偶然を装って声をかけ、大人っぽくなった自分をアピールする手もある。そうしたら、橘くんはまた自分のほうを見てくれるようになるかもしれない……。

そんな想像に有希はひとり胸を高鳴らせていた。

「あっ、来た来た!」

ユカが声を上げた。

「……どれ?」

胸の鼓動を抑えて有希は必死に目を凝らした。

「ホラ、あの子。あのワンレンの……」

「……南野陽子に似てる子?」

のけぞったのは、ユカだった。

「似てるもなにも、そっくりじゃん!」

歩く姿も優雅な彼女は、高校1年生には見えないほど大人っぽかった。色白で黒目がちで、清楚な中にもほのかな色気が漂っていた。ごていねいにも南野陽子と同じところにホクロまであった。

「あの子、いろんな男の子をフリ続けてるので有名でさ。けっこうヤな女だって噂だけど、あれじゃあね。性格悪くたってなんだって男はホイホイついてくよ」

ユカはダメ押しのように言った。

「……どうする?」

呆然としている有希の様子に気がついて、ユカが申し訳なさそうにつぶやいた。

「……ダメだわ」

「……私もそう思う」

ふたりの目は、なにげなく有希の下半身に注がれていた。

フラれたストレスでここのところ過食症気味の有希の体重は、いまや50キロの大台に上らんとしていた。

「今日はありがと。じゃ、私、行くわ」

有希は力なく言った。

「ねぇ、そんなに元気なくさなくても……」

「……ダメだわ」

まるで呪文のようにつぶやく有希に、ユカは一緒に帰ると言ってみたが無駄だった。

ひとりとぼとぼ家路をたどりながら、有希はすべてが自分から遠ざかっていく気がした。どれほど橘くんを思っても、彼はどんどん遠くへ行ってしまう。相手はすでに心変わりしているというのに、いじましく思い出を大切にしている自分がみじめだった。一緒に写った写真や誕生日にもらったプレゼントをいまだに大事にしまっている自分がばかみたいに思えた。

気持ちを振り払うように空を仰ぐと、ダークブルーに暮れかかった空の端っこに、かすかにオレンジ色の光が見えた。

「なんかいいことないかな～」

この頃から、それが有希の口癖になった。

刺激のあることならなんでもよかった。退屈で、今日は昨日のただのつながりにしか思えないような日々にカンフル剤を打ってくれるなら、多少の悪いことも臆せずやれた。煙草や酒も覚えて、有希はしだいに校内のめだつグループのひとりになっていた。

家でシンナーを吸って、気を失うまで父に殴られたこともあった。

万引きで補導され、姉に身請けに来てもらったこともあった。

おとなしい姉に叱られたときには、さすがに“人に迷惑をかけちゃいけない”と思いはじめていた。

物理のわけのわからない公式をノートに取るうち、じわじわ眠気が襲ってくる小春日和の午後。もうろうとする意識と戦う意欲もなく机に突っ伏した有希は、いきなり肩を揺さぶられて、目を覚ました。

「有希、有希ったら!」

「あれ? なんであんたこんなとこにいるの?」

仲間の京子だ。

「授業なんかとっくに終わってるよ。それよりさ、朝からみんながイモヅルでヤラれてるって、知ってた?」

「なんのこと言ってんのー?」

「生徒指導に呼び出し食らって、ひとりずつ、他に誰が何々をやってましたって、チクらせられてんだって。私もあんたもそのうち呼び出されるよ」

「汚っねえ! それ、仲間売らせてるってこと?」

「そうよ」

「だけど、誰かチクッたりしてるの?」

「誰かも何も、今まで呼び出されたヤツ全員がチクッてるって話だよ」

「嘘でしょう?」

「嘘じゃないったら。ねえ、有希はどうなの? 呼ばれたらチクるつもりある?」

「ないよ、もちろん」

「そうだよねー。とにかく覚悟しといたほうがいいよ」

ところが、そう言ったはずの京子が、有希の名前をチクッてくれた。

生徒指導の部屋で詰問されながら、不良仲間の絆の弱さを有希ははじめて思い知った。

「磯谷さん。あなたも他にやってた人を知ってるんでしょう? ひとりでいいから名前を挙げなさい。そうしたら停学は免除してあげます」

教師は脅すように言った。

「知りません」

有希は淡々と繰り返した。

仲間意識の強さからではなく、仲間と言いながらも自分の罪を軽減するために、簡単にその仲間を売るような人間に成り下がるのが嫌だったからだった。

いくら問いただしても口を割らない有希に愛想をつかして教師は言った。

「わかりました。お母さんに来ていただきましょう」

「明日から2週間の停学です」

母と並んで判決を言いわたされた。

「父さんの顔に泥を塗って……」

そう言って、母は泣いた。

父は何も言わなかった。

結局その事件で何人もの仲間を失った。

みんなの罪をかぶって自ら退学した仲間もいれば、やめさせられた仲間もいた。残ったのは、なんとか停学処分ですんだ友達と“仲間を売った”ヤツだけだった。

有希の中で何かが吹っ切れた。

停学が解けると、それまでやっていた遊びにはもう興味が持てなくなっていた。